住宅設計の姿勢と住宅産業の構造

神代雄一郎

「規格構成材方式による住宅」と「塔状住宅」

去年のちょうど今ごろ，わたしは朝日新聞の求めに応じて，年間の建築作品からベスト5を選び，その中に綜建築研究所による奏邸をあげた。この住宅は，「建築文化」誌（'67-9, 251号）だけが「規格構成材方式による住宅」という題でとりあげたが，他の建築雑誌にはとりあつかわれなかった。あとで，旭硝子KKのPR誌「ガラス」にも紹介されたが，これは綜建築研究所がこのPR誌の編集にかかわっているからだろう。とにかくこの住宅をとりあげたのは，たった一つの建築雑誌だったのである。ところが，朝日新聞にのったわたしのほんの数行の紹介にもかかわらず，いくつかの大衆雑誌から，この住宅についての問合せ電話がかかってきた。その中には，「文芸春秋」編集部からのもあって，わたしはこうした大衆誌の編集者たちの，その眼力に恐縮した。わたしがこの住宅に興味をもったのは，それがいわゆるプレファブ住宅とはまったくちがって，いわば工場やオフィスビルやホテルといった大建築をつくるために，規格化され工業生産化された確実な部品や構成材を組合わせて，住宅をつくったということにあった。したがってわたしの紹介文も，従来の住宅設計や建設の体制とは別の，そうした新しい住宅設計建設の方法をほめたものであったから，大衆誌の編集者もそこに共感をおぼえたのだと思う。

事実，電話でもっとくわしくこの住宅を説明すると，編集者はさらに興味を加えたかに聞きとれたが，最後に工費の話になると，考えこんでしまった。この住宅は各部品部材メーカーによる施工をつなぐことで建設されたのだが，その工費合計は一括請負業者の見積りより30%も安く仕上っている。しかし坪単価は家具や全設備を含んで，たしか20万を割った程度だったと思う。この坪20万という数字を聞くにおよんで，編集者はがらりと態度をかえた。それでは，その方法がいかほど新しく，住宅設計の停滞を破る興味深いものであっても，大衆にはアッピールしないというわけである。わたしは都心のホテルやマンションの，坪40万50万という数字を思えば，ちっとも高いとは思わないし，この方法こそ確実に将来のコスト・ダウンを約束するものだと思うのだが，大衆誌はこうした場合，また別のとりあげかたをするわけで，それはあとで述べる。

結局，「規格構成材方式による住宅」は，ほとんどジャーナリズムにのらなかったのであるが，同じく昨年の住宅で，東孝光設計の自邸「塔状住居」は，多くの建築雑誌が取上げたし，大衆誌にも登場した。この住宅については，ちょうど1年前の「建築文化」誌（254号'67-12）に，宮内康氏がうまくその性格をとらえて書いているので引用させていただくと，

「東孝光の自邸については，すでに賛辞を送ってしまったこともあって，ここでは発言を控え目にせねばなるまい。ともあれ，この住宅の普遍性と独創性は，6坪の敷地の持つアイロニーにあることは繰返さねばならない。郊外の何十坪かの土地と等価の都心の6坪の土地の切れはし。この建物の前では，これまでのどんなコートハウスの試みも，成長発展計画も色あせてしまうのである。『都心から車を走らせること1時間余り，郊外の分譲地を見に行ったとき，自分はどうしてもこんな所に住めそうにないと直感した……。』，『都市の真ん中で生まれ，終戦後の瓦礫とバラックの中で少年時代を過し，都会の喧噪と混乱の歴史の中で育った私はこれからの都市の変化をその真っ只中で考え……』と住み手東が告白的に語るとき，その象徴的意味は明白である。6層に積み重ねられたこの住居は，都市の心臓部に颯爽とそびえ，郊外住宅と団地をあざ笑い，そこで営まれる生活はこれまでの建築家のすべての努力を徒労なものにしてしまうのである。」

都心の6坪に6層に建つこの塔状住宅を眺めて，わたしも同じように評論するだろうと思った。たまたま日本にきていて，わたしと同行したニューヨークの美術評論家には，この住宅のアイロニーと象徴性がぴったりきたのだろう，「おれもニューヨークでこれをやろう」といきまいた。たしかにそういう普遍性をもっているのだが，ひとたびこれが日本の大衆誌の住宅欄にのった効果をみると，アイロニーと象徴性は，ただの現実性と表現の面白さに褪色してしまっているのだった。アイロニーとか象徴性とかはいつも，大衆には通じていきにくいものである。

それはとにかく，わたしがこの文章の最初に，「規格構成材方式による住宅」と「塔状住居」の二つを取上げたのは，住宅設計の姿勢が，かくも烈しく引き裂かれているという現状を，象徴的に指摘してみたかったからに他ならない。わたしはこの二つの住宅を設計した人たちの年齢をしかと調べたわけではないが，おそらく五期会やメタボリズムの世代より，もう一つ若い世代に属する人たちだろう。いまかりにこの二つの世代の間に線を引いてみると，旧世代が一方では人工土地・海上都市・塔状都市といった未来像ポスターをかかげながら，他方では，かなり旧い方式にたよった独立住宅を設計していたのにくらべて，新世代は，とにかく都市問題をも含めて現実にきわめて新しく独立住宅をつくってしまっている。この新しさとその実現がかちんと結びついているところが，新世代の特色だが，それ

がかくも対極的に現われ，住宅設計の姿勢の幅を両極へ可能なかぎり引き延ばし，いまやそれを烈しく引き裂こうとさえしているかにみえるところに，住宅設計が追いこまれている停滞と不安をふくんだ現状が，露呈していると思うのである。

「規格構成材方式による住宅」と「塔状住居」とは，独立住宅設計に現われた二つの対極的な特殊解であろう。多数の一般解，つまり建築雑誌の住宅特集号を飾り，住みよい住宅集といった表題の本にならんでいるような，一般的な住宅設計の内部にも，それ相応の問題があり，わたしはそれを軽んずるのでもないのだが，こうした既成の住宅設計体制内のことについては，最近わたしはあまり興味がないし，ここではふれるつもりもない。ただこの建築ジャーナリズムにどっかり腰をすえてしまっている住宅設計の，どうしようもない停滞状態があるからこそ，一方では「規格構成材方式による住宅」という，他方では「塔状住居」という反体制の姿勢がでてくるのだという，その状況には興味があり，それを知ってもらいたいと思うのである。例えば，「規格構成材方式による住宅」の設計者たちにも，「塔状住居」の作者にも，わたしは現在のスチューデント・パワーがもっているような，反体制の心情が内在していると思うのである。

「塔状住居」について宮内康氏が，「この建物の前では，これまでのどんなコートハウスの試みも，成長発展計画も色あせてしまうのである。」それは「郊外住宅と団地をあざ笑い，そこで営まれる生活はこれまでの建築家のすべての努力を徒労なものにしてしまうのである。」と書いたのを読むとき，わたしの眼前にはヒッピーが浮かびでてきて，「塔状住居」こそは，住宅設計におけるヒッピーだと認識されてしまうのである。ヒッピーの原理の中心をなしているのは，社会の既成の体制から自らをとりはずして，自分自身の象徴的な文化を創る，ということにあるのだろう。そうだとすれば，いつ果てるとも思われない既成の住宅設計の体制から自分をはずし落して，都心の6坪に6層の塔状住居を建てて自ら生活するのは，まさにヒッピーといえるだろう。

「一戸建住宅」という設計課題がでたとき，どうしたらいいのかまったく考えこんでしまったと，わたしに真面目に語った学生がいる。住宅設計に対する既成の知識は十分にもっているのである。だがなぜ，わたしたちは多くの住宅設計例から読みとれる住宅設計の方針に従って，ことあたらしげに大同小異の住宅を書いて見せなければならないのだ，というわけである。そして大学を卒業してからも，同様に同じような間取りや，同じような風呂場や便所の，タイル割りをいちいち書かなければならないのだ。自動車や飛行機といった，住宅よりはるかに高性能なものが大量に生産され，人工衛星は月に到達しようとしているのに，住宅ばかりとりのこして，馬鹿にしてもらいたくない。「規格構成材方式による住宅」の設計者たちには，おそらくこうした心情があるにちがいない。そしてわたし自身は，「塔状住居」と「規格構成材方式による住宅」のいずれにかかわってもいいわけであるが，後者にいっそうつよく引きつけられてしまったわけである。なぜなら，ヒッピーはわたしなりにわかるつもりなのだが，わたし自身，この年齢ではヒッピーになりきれないのである。そして，「規格構成材方式による住宅」の方は，その将来にますます用意が深められているように思えたからである。

「プレファブ―近代建築の主役」と「住宅産業―経済成長の新しい主役」

「規格構成材方式による住宅」といった考え方は，どうしたらもっとすなおに広まってゆくだろうか。年末のベスト5にこれをあげたあと，わたしがそんなことを思いつづけているところに，1月末，一冊の書物がとどいた。内田祥哉著「プレファブ――近代建築の主役」である。日ごろ，建築の工業化促進を念願とし，「組立て方」に熱中するこの著者によって，この著書が現われたのは当然だろう。そしてその内容は，「規格構成材方式による住宅」にかかわっていたわたしにとって教えられるところが多かった。とくに，日本のプレファブの発展現状やその問題点をとらえている部分は，まことに興味深かった。たしかに，「規格構成材方式による住宅」を支えるような，新しい体制は時々刻々に用意を深めていっていることがわかるのである。だが，何よりわたしがびっくりしたのは，この本が，講談社という一般図書を対象にした大出版社から発行され，しかもそのなかでとくに大衆をあいてにしたブルー・バックスという新書版で出現したことであった。この驚きは，数年前に古川修著「日本の建設業」が，岩波新書の一冊として出現したときに感じたものと同じである。

先にも述べたとおり，「規格構成材方式による住宅」型よりも，「塔状住居」型の方が，建築ジャーナリズムにも一般ジャーナリズムにものりやすい現状である。にもかかわらず，「プレファブ」という問題も，ついに一般ジャーナリズムにとり上げられるようになったのかという感慨がわたしにはあった。「規格構成材」の方は，いわば建築家無名化の方向であり，「塔状住居」の方はその有名化であろうから，当然後者の方が建築ジャーナリズムにはのりやすい。

わたしのような，近代建築を研究しているものも，とかく近代建築の主役は建築家だと思っているのかと反問されるような書きかたをしてしまう。建築論が作家論でありすぎるということは，よく注意されるし，たしかにそうだと思うのだが，自然そうなってしまう。これはおそらく建築ジャーナリズムの歴史的体質なり体制なりがさせるのだろう。

そこへもってきて「プレファブ――近代建築の主役」ときたのだから，この副題は大いにわたしをゆさぶったわけだ。近代建築の主役が建築家ではなくてプレファブである時代がもう用意され，そこまできているわけである。ところが建築家，とくに住宅設計家のなかには，いわゆるプレファブ住宅ぎらいからくるプレファブぎらいみたいなものがある。プレファブとプレファブ住宅とはちがうのだということは，「プレファブ」の中にも，また「規格構成材方式による住宅」を説明した剣持昭氏の文章にもはっきり書いてあるのだが，建築家の中にはそれさえはっきりしない人が多いらしい。そんなときには，建築ジャーナリズムをとびこして，といった勢いを，わたしは「プレファブ」の講談社からの出版に感じたわけである。

事実わたしは，プレファブを促進する力の主体は，いまの建築家たちにはないのだという気がする。それは，産業なり企業の中にあるのだろう。年末に「規格構成材方式による住宅」を推薦し，1月に「プレファブ」をいただいて感嘆したわたしは，3月には中央公論(1968-3月特大号)誌上に「住宅産業――経済成長の新しい主役」という論文を発見して魅了されてしまうことになった。技術評論家内田元亨氏によるこの論文は，当然建築評論家か建築科出身の官僚や政治家によって書かれなければならないような内容をもっている。にもかかわらず建築界がもたもたしていると，大衆誌はこういうあつかいをしてくるわけである。「規格構成材方式による住宅」の将来性にひかれながらも，いまそのコストがかなり高くて一般にアッピールしないとみると，一般大衆誌はそれを「住宅産業」というかたちでとりあげて，建築界に問うてくるわけである。この内田元亨論文「住宅産業――経済成長の新しい主役」は，あまり建築雑誌の読者の目にふれなかったと思うから，ここでちょっと，わたしなりの要約をさせていただきたい。まずこの論文の構想は，第二次大戦後の日本経済のめざましい成長が，いつもそれぞれの時期に，主役となる産業をもっていたことで果たされてきたという考えの上に，展開している。彼は5年ごとに，日本経済が一つずつ階段を上ってきたとして，昭和30～35年は電力多消費型の合成繊維・化学・鉄鋼業などが成長の主役であり，35～40年は「電力業と鉄鋼業が機械工業を媒介として伸びたため，機械工業が急速に強化され，はじめて電力小消費型の産業が日本経済を引き上げる主役としてあらわれてきた」としている。そして40～45年の主役はいうまでもなく自動車工業である。

「機械工業はよく言われるように，部品工業なしでは成立しない産業である。わが国の機械工業の発展を見ると，部品点数が200点くらいのミシンからしだいに高級な2000点くらいのテレビ，そして5000点くらいの工作機械と，しだいに点数の多いものが生産できるようになってきている。これが自動車になると約15000点で，日本の機械工業の組織化がここまでになるには15年近い歳月が必要であった。」わけである。さてそのあとは，「日本経済はしばらくの間，主役が出てこないのではなかろうか。今までの経験によれば，日本経済は主役のはっきりしている時に大きく伸びており，主役がはっきりしない時に停滞している。日本経済は今，欧米的な意味で消費誘導型の先進国経済に移行しつつあるが，もし主役があらわれないとすると，相当長期間，場合によれば5年～10年も長期的に停滞するのではなかろうか。」

それではこまる。そこで「これを防ぐにはわれわれの手で新しい産業をおこすことである。その条件は，機械工業的であること，耐久消費財的なものを生産すること，公共投資と結合していること，しかも公共投資の増加にともなって，国全体としての生産効率の増加に寄与できるものであることである。」まさに，住宅産業こそぴったりではないかというわけである。住宅産業，それは日本の経済成長のための新しい主役である。わたしはこの論文の，こうした出だしを読むに及んで，いよいよ住宅設計に長年にわたってみられた停滞も，うちくだかれるのはそう遠くないのだな，という感じがしてきたのである。

もちろん，そんな時代がきても，これまでの住宅設計の一般解のなかに蓄積されてきたものは，自然のなかの別荘や，農地の値上りやお米でもうけた農村住宅などの中で，役立ってゆくのだろう。しかしいま，都市のホテル，マンション，団地アパートなどで，バラバラに成熟していっている方向は，かなり新しく統合されて，それが，住宅設計の主役になりかわるだろう。建築雑誌の住宅特集号も，住みよい住宅集も，面目を一新することだろう。一軒一軒ちがった設計が中小建設請負業者によって生産されてゆく住宅は，万博にむかって急速にあらわれてきた大工など職人なり労務者なりの不足，またその現場労務費の上昇ということからだけみても，命脈が知れている。そして他方では，住宅産業の可能性が日増しに大きくなっている。それは，オリンピックから万博をあてこんで急に数をましたホテル建設の中で，ほとんど完全にユニット化されたバスルーム一つをみても明らかではないか。

ところで内田元亨氏が，日本経済成長の主役としてイメージする住宅産業，住宅を安価に大量に供給する産業の内容とはどんなものか。「まず住宅の建築を大きく分けて二種類の技術によって行なうものとする。第一は住宅を入れる棚をつくる技術であり，第二は住宅という箱をつくる技術である。棚は約20階程度の鉄骨で組み上げた人工土地のようなものと考えればよく，箱はちょうどマッチ箱のように単純な四角形をしており，引出しのようにこの鉄骨の骨組の中におさめられるようにする。このいわば中身にあたる部分の大きさは，約70 m²(20坪)で，台所やバスルームばかりでなく，内装も完備し，冷暖房設備もととのえられている。現在の住宅建築技術では1 m²あたり約10万円(坪あたり約30万円)の高級マンション以上のものを考え，これを工場において大量生産し，一般大衆が入手できるような価格で供給することを考えたい。」以下その可能性がことこまかに述べられているが，これらは大衆誌上で一般のひと相手に書かれているわけで，この程度のことは，もう何年もまえから建築家たちの思考していたものとかわりない。げんに，内田祥哉氏らの提案GUPの，一番新しいそのGUP計画NO.5(本誌264号，'68-10)を見ても，建築家の設計技術が内田元亨氏の論文に十分こたえていることは容易にわかる。

ただ，わたしはGUP計画NO.5をみて，そのあらゆる方面に対して均衡のとれた設計に大いに賛意を表したいと思うが，他の多くの建築家たちのこうした提案は，とかく実現に信頼性がもてない程度のものか，あるいは逆に，はじめから安いことを考えてか，いたってミミッチイものであって，これではのってゆけない。そうしたあたりを，内田元亨氏は自身のイメージするものを「高級マンション以上」とか「自動車より難しくジェット機よりやさしい」という表現で説得しているところが痛快なのである。

「このような量産住宅をつくる技術開発の難しさは，どの程度のものであろうか。」と彼は反問する。「それはこの住宅の一戸当りに必要とされる部品数からも推定できよう。大ざっぱな推定で，私は部品点数は自動車と飛行機の中間，すなわち1万点から20万点の間にあり，おそらく2～5万点くらいですむのではないかと思っている。したがって，技術的な困難さは自動車よりも難しく，ジェット機よりもやさしいと考えれば適当ではなかろうか。住宅というのは存外に部品点数が多いものであって，安全な量産をすることは，精度や信頼度の点からみて，非常に大きな技術的問題をかかえている。たとえば部品数が1万点の製品なら，どの部品も，1万のオーダー以上の信頼度がないといけない。すなわちどの部品にも1万個に1個の不良品があったならば，組合せの確率から1万個の製品のほとんどが不完全品ということになる。われわれが経験を通じて知っているようにすべての機能が完全に動いている家はおそらく一軒もないであろう。ドアの把手がこわれていたり，完全にしまらない戸棚があったり，全部が設計者の期待どおり動いているということは，住宅の場合まず考えられないというのも，部品数が多くなるにつれて，信頼度への要求が急速に高まるという，生産工学的な常識からは当然のことが起っているにすぎない。現在の住宅は技術的観点からは，工業製品というにはほど遠いものである。したがって，これを量産的な工業製品にするためには相当な技術開発投資を必要とすることになろう。」

ところで一応内田元亨論文の紹介を終えるために，ここで彼の結論を伝えておくと，アメリカは自動車産業につづいて航空機産業，さらにロケット工業とおこったところに，その経済成長の原因があった。これは軍事的な要請もあってのことだったが，日本の場合は，「住宅工業技術の開発を，まったく軍事的な要請にもとづかない，最初の新産業として，日本民族の手によって完成させたいと思う。」というものである。

「住宅産業の可能性」と「デザイン・サーヴェイ」

さて，いわば工業生産化の現状をふまえて実現した一つの単位「規格構成材方式による住宅」を知り，近代建築の主役たるべき「プレファブ」の歴史と現状と問題点と提案を読み，経済成長の主役たるべき「住宅産業」の理想と可能性に耳をかたむけたのちに，わたしの内部に二つの問題が提起されてきた。その一つは，住宅産業はどのような構造をめざしたら，一ばん早くしかも可能性ゆたかなものとして開発されてゆくだろうか，という問題であり，もう一つは，こうした産業の勃興にともなって当然おこるだろう対人間の問題が，あまりにも考えられていなさすぎるのではないか，という問題である。これはいずれも大問題であるが，わたしなりにその焦点と思われるものをあげてみると，前者については，住宅産業をどの程度一般材料産業や一般建築産業に開いたものにするのかということだろうし，後者については，高層であれ低層であれ一戸建であれ，とにかく大量生産される巨大な住宅建築群の設計ということ，計画ではなく設計の用意が，何もされていないではないかということである。

まず住宅産業の構造の問題であるが，それが

いわゆるプレファブ住宅産業のような閉じたものであっては，どうにもならないことは，お察しのとおりである。はじめから住宅という建築種だけを対象にし，しかも一つの企業体専用の規格で，パネルなりユニットなりをつくっている現代の閉じたプレファブ住宅産業は，その閉じた構造自体が自らの首をしめているようなところがある。先にあげた「規格構成材方式による住宅」にわたしが将来をみるのは，これが閉じたプレファブ住宅の原形をつくろうとしているのではなくて，Gコラムとかシポレックスとかいった，まったくあらゆる建築に開いて生産されている規格材を，住宅をつくるために結集してみせているところにあるわけである。

だいたいわたしは，いま考えてきているような住宅産業の可能性は，まず住宅という枠をこえた大きな範囲でのパネルなりユニットなりの産業化ができなければだめだと思っている。規格化をすすめるための大きな基盤をつくることがまず必要である。わたしはよく知らないのだけれど，いま建設省・通産省・郵政省・電電公社・住宅公団・国鉄・都庁など官公庁・公団・公社の間には，そこで設計採用する建築材料についてどの程度規格統一がされているのだろうか。そうすることで大量生産化・産業化を深めてゆこうとする努力は，どのくらい払われているのだろうか。民間の住宅ホテルとマンションとアパートを統合して，産業の需要構造の背骨をつくってしまうというようなことは，まず不可能であろうが，せめて官公庁・公団・公社にできるだけ民間も加わったような，かなり集中的な需要構造をつくる必要がある。規格そのものをきめるのは結局官公庁のしかるべきところだろうが，わたしはそれよりも，官公庁がまず集合して大きな需要者になる必要があると思う。

わたしは先にも述べたが，建築家は規格化なり住宅産業開発にむかって，主体的な力にはなりえないと思っている。建築家にはそれぞれが自己の規格を主張しようとする強い姿勢があり，一品生産こそが自己の芸術的使命であるとするような根強い主張がある。だからそれぞれが，違った規格の立体格子や人工土地を主張し，違った海上都市や空中都市のポスターは描くけれども，それは現実の大きな規格化や産業化には収斂してゆけないのである。建築生産の工業化は，別のところ，産業資本なり企業なりと，拡大された需要構造とのかみあいのなかで，開発されてゆくだろう。この大きく統合し，民間にも開かれた需要構造にひきずられて，建築の材料産業やパネルやユニットを製作する産業が完全に大量生産と呼べるほどの規模の生産構造を獲得しなくては，住宅産業は成立しないだろう。したがって逆にいえば，住宅産業は当然住宅生産に収斂しなければならないのだが，それは大きく一般建築を対象にした材料産業・パネルやユニット産業を基盤にし，常にそれらに対して開いた関係をもっていなければならないのである。わたしは経済の専門家ではないから，こまかいことはわからないけれど，今年日本建築学会の大会では，建築経済部門の研究協議会が，「住宅産業の可能性」を議題にしている。そのリポーターの一人水田喜一朗氏は，住宅産業のパターン三つを図式化して提示しているが，その一つは一品生産の在来型住宅産業で，現場での加工・集成にたよった，わたしが現代の一般解と呼んだものである。そして第二は，現在のプレファブ住宅産業で，技術的には部材・部品の工場生産化が行なわれ，現場での加工・集成の比重はかなり低下してはいるが，わたしが閉じている宿命だというように，生産構造は中・小量生産に属するものである。そして第三が，パネルおよびユニットの工業生産が大量化し，現場加工・集成の比重が大幅に低下した新しい住宅産業である。わたしはいま第1の型のなかで，一般解を設計する建築家たちも，こうした産業のパターン，とくに第3の型のパターンを理解してもらいたいと思う。なぜなら，一品生産の在来型住宅産業の内部にも，労務者不足や現場労務費の高騰という問題があるからであり，したがって部分的に工場生産品にたよってゆく場合，そのたよりかたが，新しい住宅産業の構造を外から強め，その開発に少しでもプラスになるようなたよりかたであって欲しいと思うからである。つまり住宅産業の問題は，いま在来型の一品生産住宅を設計する建築家たちの姿勢と決して無縁ではなく，むしろ問題はいつもはねかえってきているのだという事実を，知ってもらいたいのである。

第二の対人間の問題，住宅建築群の設計というところでは，わたしは個々の建築の設計について日本人が100年にわたって行なってきた，狩猟型の先進国文化模倣の過程を，もう一度くりかえしてもらいたくないと思うのである。違った気候，異なった地勢，農耕型の民族性や生活習慣，にもかかわらず欧米模倣の建築設計がこの国で成立しえたのは，幸いにも科学や工業技術の急速な発達が得られたからである。しかしいま大きく住宅産業が開発されようとしている段階で，そしてその目指すものが，たとえば暖房冷房を完備した水準のものであれば，もはや大量の住宅を高層化するにしても，ただ緑地や日照の回復をうたうだけではすまされないだろう。人間はその生活に工業が高い寄与をすると同時に，他の生活面でも高いものを欲求するからである。そこで，この新しい次元で，西欧的な高層化住宅棟の等間隔配置・日照緑地回復主義を克服した，日本人むきの建築群の設計というものを確立してゆかねばならないように思うのである。わたしがニュー・オルリンズでみた，フランスやスペイン風のアイヨン・レースを窓まわりにつけ，白い粉砂糖をまぶしつけたように白ペンキを吹きつけられて，都心近い日本の街なみの中に孤高をうたうマンションではなく，また20年間，ほとんど基本的には何の変化もなしに，等間隔に幾何学的に配されてきた団地アパート群でもなく，とにかく，団地開発の具体的な設計にたずさわる人たちが，計画資料はあっても設計資料はまったくないと嘆くことのないような，何かが創られてゆかねばならないだろう。それを誰がどのようにやってゆくのか。それは一品生産にあぐらをかいた建築家のかたてまではできるものではない。

一品生産の住宅が集って，それぞれ形をきそい，色瓦をきそい，新建材をきそい合ってひしめく団地の姿の醜悪さは，わたしもたびたび指摘したし，多くの人がなげくところの風景である。だが大量生産化された同じ住宅が沢山に集るときのことを考えてみると，これはまた一品生産物の集合とは質こそ異なれ，現段階では同程度の醜悪さが予想されるのである。つまり，団地や集落のデザインというものは，いずれにしても現在まったくといっていいほど手がけられていないのである。同形の単位は，いくつまとめられたとき視覚的にも生活的にも具合がいいのか，一つのフロアに集めるときはどんな集まりかたが都合がいいのか。住宅棟と道や広場とのつながり方は，どんなところではどんな構造がとられるべきなのか。そういうことを，外国の団地例からではなく，日本の集落から吸収してくることが，まず必要なのではなかろうか。

近年ようやく日本でも，集落の「デザイン・サーヴェイ」ということが，はじめられてきた。芸大の茂木計一郎研究室，東工大の篠原一男研究室，法大の宮脇檀研究室にはじまって，明大のわたしの研究室でもやっているが，その調査実測例の合計がかなりの量になってくると，わたしはそれが，こうした住宅産業に対応したかなり基礎的で具体的な資料になってゆくのではないかと思っている。と同時に，集合体を対象にしたデザイン・サーヴェイとはかかわらなくとも，在来の姿勢で在来の一品生産住宅をデザインしていても，それはまわりの環境とは結局いつも深い関係をとりむすばなくてはならないのだから，やはりそうした住宅設計の姿勢のなかにも，この問題は刻々と強まりながら，はねかえってきているわけなのであろう。一戸建一品生産住宅設計家たちも，もっと強くまわりを意識しなければいけないし，それをとりあげるジャーナリズムも，まわりの環境を落してはいけない。建築写真家もそうである。（明治大学教授）